

2014年度 卒業論文

山田正雄ゼミナール

—巨大百科事典ウィキペディア—
いかにして発展を遂げたか、今後の可能性

日本大学法学部 公共政策学科 4年

学籍番号：1150152

坂井里衣

はじめに

私たちは情報化社会の中で、日々大量の情報を得ながら生きている。かつての情報を得る手段であるラジオや新聞、テレビに加え、インターネットの発達により、情報は秒単位で更新されることが可能になった。何が必要な情報であり、真実性があるか見抜き、情報処理することは困難でさえある。

現在どんなキーワードでネット検索しても、たいていウィキペディアのページが上位に表示され、ウィキペディアに誘導される機会は増えた。それだけインターネットにおいて欠かせない存在になっているウィキペディアだが、「どれくらい信頼できるのか」「著作権はどうなっているのか」「学問的価値は存在するのか」などと思うことも多いのではないか。

資格も持っていない、どこの誰が書いたかも分からない文章で、信頼性には疑問の余地があるウィキペディア、しかし実際には数百万というユーザーによってサイトが利用され、確実に人々の役には立っているという事実。反対に、非営利組織でボランティアによって無償で作成されている、一体なんのためにそこまでするのか。

本論ではウィキペディアを『利用する者』『提供する者』両者の立場から着目し、いかにしてウィキペディアが一大現象を巻き起こすまでに至ったか探り、両者の立場の問題、課題をそれぞれの検討していく。

他言語のウィキペディアと比較しつつ、ウィキペディア日本語版に焦点を当て、さらに百科事典としての存在意義を、他の百科事典と比較していきながら、探っていきたいと思う。さらに運営上の課題や、記事についての名誉毀損問題等にも触れ、今後起こりうる問題についても検討し、ウィキペディアの可能性を考察する。

目次

はじめに

1 ウィキペディアとは

- 1.1 ウィキペディアとは何か
- 1.2 ウィキペディアの機能
- 1.3 ウィキペディアの管理者
- 1.4 ウィキペディア仕組み
 - 1.4.1 記事の投稿、編集
 - 1.4.2 方針・ガイドライン
- 1.5 ウィキペディアの歴史・成り立ち
- 1.6 世界と比較するウィキペディア日本版

2 ウィキペディアの現状

- 2.1 管理者の役割と実例
- 2.2 ウィキメディア財団

3 事例からみるウィキペディアの問題点

- 3.1 管理者側の虚偽
- 3.2 疑問視されるコンテンツの信頼性
 - 3.2.1 コンテンツの信頼性
 - 3.2.2 教育現場の事例
 - 3.2.3 新聞の事例
- 3.3 荒らし
- 3.4 3章のまとめ

4 ウィキペディアの課題

- 4.1 編集合戦
- 4.2 管理者側（何を載せるか）
- 4.3 名誉毀損問題

5 おわりに

1. ウィキペディアとは

1.1 ウィキペディアとは何か

ウィキペディアには定義とされているものはないが、以下はウィキペディアによるウィキペディアの説明である。

ウィキペディアは、信頼されるフリーなオンライン百科事典、それも質量ともに史上最大の百科事典を、共同作業で創り上げることを目的とするプロジェクト、およびその成果である百科事典本体です。

ウィキメディア財団が運営しているインターネット百科事典。コピーレフトなライセンスのもと、誰もが無料で自由に編集に参加できる。世界の各言語で展開されている。「ウィキペディア (Wikipedia)」という名前は、ウェブブラウザ上でウェブページを編集することができる「ウィキ (Wiki)」というシステムを使用した「百科事典」(英: Encyclopedia) であることに由来する造語である。(ウィキペディアより引用)

ウィキペディアは、ユーザー自身が編集し、内容を拡張していく、「誰でも自由に編集できるウェブ上の百科事典」である。また誰もが無料で読むことができるため、現在ではインターネット検索の際、ウィキペディアに出くわさない方が難しくなった。全世界で15万人以上が執筆し、合計1000万以上の項目を有する巨大百科事典である。ウィキペディアの運営は、米国フロリダ州法による非営利組織であるウィキメディア財団によりされている。同財団の目的は、ウィキを用いたオープンコンテンツ¹の知的資源を開発するプロジェクトの促進、およびその資源を無料、広告なしで広く公衆に提供することにある。

1.2 ウィキペディアの機能

ウィキペディアは誰もが無料で読むことのできる百科事典です。単語につけられているリンクをクリックすると、その単語のウィキペディアの記事が表示されるようになっている。そのため、リンクからリンクへと永遠にたどることができる。

記事については誰でも投稿することができる。投稿履歴が公開されており、いつ誰がどのような編集をしたかが把握できるようになっている。記事の執筆・編集に関わるには特別な参加資格は必要とせず、方針とガイドラインを守ることのできる人なら誰でも参加することができ、次から次へと加筆・修正することができる。アカウントを取得することは推奨されるが、アカウントはなくても参加することが可能である。

立候補や推薦で選ばれた管理者は一般ユーザーに行使できない機能(「ページの保護」や「投稿ブロック」など)を持つが、一般ユーザーの意見よりも管理者の意見の方が重要だとはみなされないようになっている。では一体この管理者の役割というのはどのようなも

¹文章、画像、音楽などの創作物などを共有した状態に置くことである。

のなのか次の項目で論ずるとする。

1.3 ウィキペディアの管理者

ウィキペディアは誰でも好きなときに好きなページを編集できる。しかし、問題となるのはページの削除である。誰でも記事を削除できるようにしてしまうと、情報が突然なくなり、作業スペースから消え去ってしまう。こうした問題があるため、削除ツールは一部の人々しか利用できないようにした。それが「ウィキペディアの管理者」の役割である。また削除にはもうひとつの重要な問題があった。時には、ウィキペディアという公共の場から情報を完全に消去した方がいい場合もある。著作権侵害や名誉毀損、不適切な個人情報などが掲載された場合である。このような問題をそのままにしておけば、重大な法的問題にも発展しかねないので、コミュニティの信頼できるメンバーを管理者に指定し、管理者のみが記事の削除および、削除解除をできるようにした。ウィキペディアはプロジェクトの人気の高まるにつれ、絶えず荒らしに遭うようになった。そのため、管理者のみが編集できるように、「保護」機能を使ってロックされるようになった。ページの保護機能は効果的だったため、管理者にはウィキペディアのすべてのページをロックする権限が与えられた。ページの保護は、人気の高いページが絶えず荒らしに遭っている場合や、ユーザー同士が妥協することなく編集を繰り返している場合に行われた。

また管理者は荒らし行為があまりにも目立つユーザーを、任意の期間完全にブロックすることもできる。

ウィキペディアの初期、2003年までは管理者への立候補はグループのメーリングリストを通じて行われており、通常はただちに承認されていた。一定期間、ウィキペディアのプロジェクトに携わっていることが条件であり、明確な反対理由がなければ、「管理者権限」は与えられていた。2003年3月になるとウィキペディア英語版の記事は10万を超え、市販の百科事典と肩を並べるまでになった。コミュニティは膨れ上がり、月に5回以上編集する常連編集者はおよそ480名、月に100回以上編集する中核編集者は100名、管理者は48名を超えるまでになった。コミュニティが急速に拡大し、電子メールでチャットを交わし、管理者の申請プロセスを得るには限界があった。すると、管理者候補を指名する「ウィキペディア管理者への立候補」というフォーラムページが作られ、正式な投票システムが導入された。2006年8月にはウィキペディア英語版の常連編集者は44193名の新記録に達し、このうちの10%が月に100回以上の編集を行う中核編集者であった。活動的な管理者は約1000名で、記事の削除、ブロック、保護といった活動を行っていた。

1.4 ウィキペディアの仕組み

1.4.1 記事の投稿、編集

ウィキペディアは、ウィキメディア財団のスタッフなどの一部の者を除き、編集から運営・管理に至る人々の大部分がボランティアである。特別な資格なども必要とせず、通り

がかりの誰でもが記事の投稿、編集等が可能である。そのためウィキペディアに初めから傑作な記事などはほとんどなく、たいていはまとまった文章にすらなっていない、1段落程度の長さの「スタブ」記事から始まる。「スタブ」記事とはウィキペディアの用語で、コミュニティによる注目や改善が必要な、短くて不完全な記事のことを指している。これはウィキペディア独特の現象であるといえる。出版された一般の百科事典では、執筆中の中途半端な記事がそのまま読者の目にさらされることはないが、ウィキペディアの文化では、あえてスタブ記事をそのまま公開することで、編集者を誘い、プロジェクトの拡大に貢献してもらう効果につながる。スタブ記事を公開することで、他のユーザーにも執筆を促し、記事を増大させていく。ウィキペディアの記事が増大するにつれ、ページの変更記録である編集履歴も増大していく。ウィキペディアでは、記事の追加、削除、修正など、あらゆる変更が記録される。各ページに「履歴」というボタンがあり、クリックすると記事の履歴が表示される。例えば、「イヌ」という記事の編集履歴には下記のような履歴がある。

図表 1: [イヌ]の編集履歴

「イヌ」の変更履歴

このページの記録を閲覧

履歴の閲覧

この年以前: 2015 この月以前: すべて タグ絞り込み: 表示

差分を表示するには比較したい版のラジオボタンを選択し、エンターキーを押すか、下部のボタンを押します。

凡例: **(最新)** = 最新版との比較、**(前)** = 直前の版との比較、**m** = 細部の編集、日時は **個人設定** で未設定なら UTC

(最新 | 最古) (以後の50件 | 以前の50件) (20 | 50 | 100 | 250 | 500 件) を表示

選択した版同士を比較

- (最新 | 前) ● 2015年1月7日 (水) 16:30 Toto-tarou (会話 | 投稿記録) ... (71,904バイト) (+71) ... (→人間社会との関
- (最新 | 前) ● 2015年1月2日 (金) 13:30 106.156.84.48 (会話) ... (71,833バイト) (0) ... (→イヌと歴史・文化)(取り消し)
- (最新 | 前) ○ 2014年12月8日 (月) 02:23 240f65bd68121aff7d6efa2e75 (会話) ... (71,833バイト) (-42) ... (取り消し)
- (最新 | 前) ○ 2014年12月1日 (月) 03:18 210.245.9.84 (会話) ... (71,875バイト) (+51) ... (→イヌに悪影響を与える食
- (最新 | 前) ○ 2014年11月13日 (木) 21:07 Kekero (会話 | 投稿記録) m ... (71,824バイト) (0) ... (→その他イヌについ
- (最新 | 前) ○ 2014年10月19日 (日) 22:13 Dexbot (会話 | 投稿記録) m ... (71,824バイト) (-15) ... (Removing Link Gr
- (最新 | 前) ○ 2014年10月17日 (金) 06:40 Dexbot (会話 | 投稿記録) m ... (71,839バイト) (-75) ... (Removing Link FA
- (最新 | 前) ○ 2014年10月4日 (土) 18:21 6057.50.230 (会話) ... (71,914バイト) (+468) ... (取り消し)
- (最新 | 前) ○ 2014年9月15日 (月) 15:11 219.107.247.178 (会話) ... (71,446バイト) (+1,646) ... (取り消し)
- (最新 | 前) ○ 2014年9月5日 (金) 06:24 61.193.124.60 (会話) ... (69,800バイト) (+2,938) ... (→出産と成長)(取り消し)
- (最新 | 前) ○ 2014年9月2日 (火) 17:43 114.180.237.246 (会話) ... (66,862バイト) (-52) ... (→その他イヌについて)(目
- (最新 | 前) ○ 2014年6月21日 (土) 13:34 Mado neko (会話 | 投稿記録) m ... (66,914バイト) (+4) ... (→嘆賞)(取り消し)
- (最新 | 前) ○ 2014年6月15日 (日) 14:58 143.90.74.237 (会話) ... (66,910バイト) (-50) ... (→概要)(取り消し)
- (最新 | 前) ○ 2014年6月9日 (月) 08:55 NEON (会話 | 投稿記録) ... (66,960バイト) (+107) ... (rv)(取り消し)
- (最新 | 前) ○ 2014年6月9日 (月) 08:34 Kota 46ra (会話 | 投稿記録) ... (66,853バイト) (-54) ... (同じく。)(取り消し)
- (最新 | 前) ○ 2014年6月9日 (月) 08:27 Kota 46ra (会話 | 投稿記録) ... (66,907バイト) (-53) ... (いつ? が表示され、ビジュアルエディター)
- (最新 | 前) ○ 2014年4月18日 (金) 08:55 114.49.1.2 (会話) ... (66,960バイト) (+226) ... (取り消し)
- (最新 | 前) ○ 2013年12月10日 (火) 18:15 EmausBot (会話 | 投稿記録) m ... (66,734バイト) (+15) ... (ロボットによる

編集の日付と時刻も、編集者の名前とともに正確に記録される。編集者の名前には便利なショートカットがあり、編集を行ったユーザーの利用者のページにリンクが貼られている。そのページにアクセスすれば、そのユーザーの投稿一覧をすばやく確認できる。ソフトウェアの最新の進化が、「取り消し」機能である。この機能を利用すると、ユーザーの変更をすばやく取り消すことができる。荒らし対策にはなくてはならない機能である。さらに特殊な「管理者」権限を持つユーザーには、「ブロック」ボタンが表示される。管理者はユー

ザーがウィキペディアを混乱させていると判断した場合、そのユーザーを一定期間、閉め出すことができる。

1.4.2 方針・ガイドライン

ウィキペディアは発足当時、ルールというものは定まっていなかった。共同設立者であるラリー・サンガーが唯一、定めていたルールは「ルール全てを無視しなさい」というルールであった。彼が言いたかったことは、ルールを定めることにより、ウィキペディアに参加しようとしている人々を遠ざけてしまうのであれば、ルールを決めず、とりあえず飛び込んできて欲しいという思いだったようだ。ウィキペディアはそのような信念に沿って進化し、最終的に3つの方針が生まれた。それが「中立的な観点」「検証可能性」「独自研究は載せない」という方針であった。これが編集者の3つの基本原則と考えられている。

中立的観点があるおかげで、人々が共同作業を行いながらも、ひとつの記事にまとめることができた。2つ目の検証可能性とは、ウィキペディアに追加された情報が、信頼できる情報源によって公開されていることを検証できるかどうかという意味であり、ウィキペディアの人気の高まるにつれ、インターネット上の出典の明記等、より厳しい基準が設けられるようになった。3つ目の独自研究は載せないは、書物や学問として確立している情報の要約のみを掲載するという百科事典本来の守るために考案された。その後4年間で、数多くの方針が追加され、方針ページがあまりにも増えすぎているために、簡潔にまとめられたものが、今日の「5本の柱」というものだ。

1. ウィキペディアは百科事典です。
2. ウィキペディアは中立的な観点に基づきます。
3. ウィキペディアの利用はフリーで、誰でも編集が可能です。
4. ウィキペディアには行動規範があります。
5. ウィキペディアには、5つの原則のほかには確固としたルールはありません。

(出典；「ウィキペディア主要な方針とガイドライン 五本の柱」)

1.5 ウィキペディアの歴史・成り立ち

ウィキペディアは、ジミー・ウェールズが2001年1月15日に個人的なプロジェクトとして開始した。

発足の経緯に関しては、ヌーペディア²の主幹編集者ラリー・サンガー (Larry Sanger) とコンピュータ・プログラマ、ベン・コヴィッツ (Ben Kovitz) が2001年1月2日にカリフォルニア州サンディエゴで行った会話に端を発するとされる。ウィキウィキウェブのインターフェースを積極的に使っていたコヴィッツは当時 Ward's Wiki の常連であり、夕食の席でその基本的なコンセプトをサンガーに説明したとされる。サンガーはそれを聞き、ウ

² ウィキペディアの前身であるウェブ上のオンライン百科事典プロジェクトであり、専門家による執筆とフリーコンテンツライセンスという特徴を持っていた。

ウィキが「よりオープンでよりカジュアルな百科事典を作る」というプロジェクトに相応しいものと考えたという。それに先立つ数か月の間、サンガーと彼の上司、有限会社“Bomis”のCEO ジミー・ウェールズ (Jimmy Wales) はヌーペディアをよりオープンな形で補完するプロジェクトについて討議を重ねていた。サンガーはウィキをヌーペディアに利用しようと考え、ウェールズを説得し、同年1月10日にはヌーペディアにウィキが登場することになった。しかし、ウィキのウェブページをヌーペディアに利用するという案に対しては、ヌーペディアの執筆者と査読者から強硬な反対意見があったため、「ウィキペディア」と名付けた新たなプロジェクトを立ち上げ、独自のアドレス (URL) である wikipedia.com にて同年1月15日から開始することになった。ネットワーク帯域と、カリフォルニア州サンディエゴに設置したサーバーはウェールズが資金を提供した。また、2002年1月まで、サンガーはヌーペディアの主幹編集員兼ウィキペディアの非公式管理人として“Bomis”に雇われていた。資金の枯渇から、2002年3月にサンガーへの給与打ち切りが決まり、サンガーはウィキペディアを含むプロジェクトでの活動を停止した。³

2003年6月以降は非営利団体であるウィキメディア財団によって運営されている。ウィキペディア日本語版は2001年5月頃に発足した。当初はソフトウェアが日本語の文字に対応していなかったため、ローマ字で書かれていた。日本語版としての実質的な執筆・編集が開始されたのは、日本語の文字が使用できるようになった2002年9月以降のことである。2002年8月、ウェールズは“ウィキペディアでは今後一切商業広告を行わない”という方針を発表し、そのすぐ後にウィキペディアのURLはwikipedia.comからwikipedia.orgに変更され、非営利化された。2003年6月20日には、プロジェクトに法人格を与えるべく、ウィキメディア財団 (Wikimedia Foundation, Inc.) が設立されたことが公表された。ウィキメディア財団はフロリダ州法に基づき、フロリダ州タンパを本拠地とする非営利法人化とされた。

1.6 世界と比較するウィキペディア日本語版

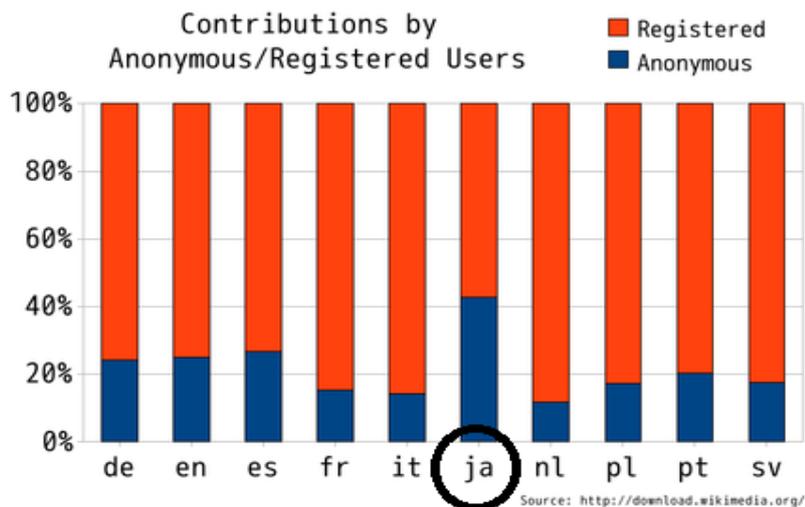
ウィキペディアは現在、273言語で執筆が行われている。全言語版合わせると既に2500万項目以上の記事が作成されています。2013年10月現在、ウィキペディア日本語版は記事数では、13番目の規模のウィキペディアであり (主要語にラテン文字が用いられないウィキペディアとしては、ロシア語版に次いで2番目)、最大の英語版の約5分の1の規模である。2005年上期までは英語版、ドイツ語版に次いで純記事数3位であったが、その後は他言語版に抜かれている。なお、内部リンク数は、3位を維持し続けている。

日本語版の大きな特徴のひとつは、編集をする利用者のうち登録せずにいる利用者の比率が高いことである。2007年12月時点で、編集回数の約40%はログインしない利用者 (IP

³ ウィキペディア発足の経緯より引用

ユーザー)によるものであり、これは主要10言語のウィキペディアのうちで最も高い割合となった。(下図参照) jaが日本語版である。2010年にはIPユーザーの比率が5割近くとなっている。

図表2: 言語版毎のIPユーザー(青)とログインユーザー(赤)の編集回数の比率



(出典 ; 『(http://download.wikimedia.org/)』より引用)

アンドリュー・リーは、他言語版およびウィキメディアプロジェクト群全体の国際コミュニティとウィキペディア日本語版コミュニティとの間の連携が強まっていない原因のひとつが、この登録済み利用者の少なさだと指摘している。たとえばウィキメディアの国際会議、第1回ウィキマニア⁴(2005年)において、ウィキペディア日本語版からの会議出席者はわずか2名であり、より編集者数の少ないオランダ語版や中国語版からの出席者数にも及ばなかった。また日本の著作権法は、アメリカ以外の多くの国と同様に、著作権の行使が制限される範囲を個別に定めており、ウィキペディア日本語版では個別に定められた範囲外で著作権のある画像を使用することが禁止されている。このため、英語版ウィキペディアでは、包括的にフェアユースを認める米国法に基づいて画像が使われているのに、日本語版には一切ないという現象がよくみられる。

ウィキペディア日本語版の記事新設数と編集回数の観点から見てみる。1日当たりの記事新設数は日本語版設置後順調に伸び続けたが、2007年3月の469件をピークに減少傾向にあり、2008年5月の1日当たりの記事新設数はピーク時と比較して49%減の240件にとどまった。2009年1月に一時300件台を回復したが再び減少に転じ、2008年5月以降は一部

⁴ウィキメディア財団の主催によって開催される国際会議の通称。公式名称はWikimedia International Conference(ウィキメディア国際カンファレンス)。2005年より年一回開催されている。ウィキペディアをはじめとするウィキメディア財団の各プロジェクトの参加者の交流と、プロジェクトに関する学術的研究の促進を目的とし、研究発表および交流行事が行われている。

240 件台もあるものの、概ね 200 件台後半で推移していたが、2010 年 5 月以降は再び減少傾向に転じ、2011 年 5 月以降はおおむね 150 件前後で推移している。2012 年 8 月にはピーク時以降で最小となる 131 件を記録した。2013 年 4 月現在の日本語版の記事新設数は 143 件であり、内部リンク数上位 10 言語版（英語版、ドイツ語版、日本語版、スペイン語版、フランス語版、ポーランド語版、イタリア語版、ロシア語版、ポルトガル語版、オランダ語版）の中で内部リンク数ではドイツ語版に次ぐ 3 位につけているものの、記事新設数では 10 位である。1 か月間に 5 回以上編集した利用者は 2007 年 1 月以降 4,000 名から 5,000 名の間で推移し、2008 年 1 月に最高の 4,989 名に達した。月に 100 回以上編集した利用者は 2007 年 1 月以降概ね 400 名から 500 名程度で推移し、2007 年 3 月に最高の 566 名に達した。しかし、どちらも 2008 年 1 月前後を境に緩やかに減少傾向にある。特に、月に 100 回以上編集した利用者の減少のほうが著しい。2013 年 4 月に 5 回以上編集した利用者は 4,164 名、100 回以上編集した利用者は 352 名で、内部リンク数上位 10 言語版のうち、5 回以上編集した利用者数は 5 位、100 回以上編集した利用者は 7 位である。1 か月あたりの総編集回数は、2007 年 3 月と 10 月の 53 万 1 千回をピークに活動中の利用者の減少と同様に緩やかに減少しており、2008 年 1 月から 5 年 2 ヶ月に渡り 50 万回に達した月がなかったが、2013 年 3 月に一時的に 55 万 9 千回に達したが、翌月には再び 50 万回を切っている。全体的な傾向としては、年々減少を続け、特に 2013 年 5 月からは 2006 年 3 月以来保っていた月間編集 30 万回を割り込むようになった。さらに 2013 年 8 月以降には 25 万回台の月が何度も現れるようになった。これらのことから、日本語版は一時的な活動活発化が見られることはあるものの、全体的な活動低下傾向が長く続いていることが分かる。また記事の増加が著しかった時期によく見られた 1 人の利用者が早いペースで次々に記事を編集していく行為は少しずつ鳴りを潜めていっていることがうかがえる。

2. ウィキペディアの現状

2.1 管理者の役割と実例

ウィキペディアの管理者として、他の利用者より異なる地位を得るには、ウィキペディアの仕組みをよく理解し、記事の書き込みに大きく貢献していなければならない。ウィキペディアンたちは、彼らだけのコードや専門用語を持っている。彼らの中で、「アドマン」というのが管理者を指す言葉であるようだ。

このアドマンの地位を、6 ヶ月かけて得たエスプリ・フュガスという 23 歳の匿名の女性を実例にとって管理者の役割の詳細を考察していく。ウィキペディアの平均的な投稿者は 20 代から 30 代の者で、独身者と学生が多いようだ。エスプリ・フュガスはウィキペディアに情熱を捧げ、極めて短期間で 3000 件もの投稿を行った。管理者の地位を得るには、投稿の数と質、そしてサイトのメンテナンスを行う能力が重要になる。十分な数の投稿を行い、登録利用者であれば誰でも投票できる。エスプリ・フュガスは賛成 123 反対 3 の圧倒的な得票率で選ばれた。

「私にとって、ウィキペディアは豊かな経験を与えてくれるものです。それは見事に私の考えと合っているのです。誰からも無視されず注目されるからです。私の理想は左翼的で絶対的な自由主義なのですが、この私の考え方や、あらゆる事柄や人物について代償を求めず、頭脳を共有して知識を分かち合うというウィキペディアの理想がうまく対応しているのです。フリーウェアのソフトやフリー・ソフトウェア・ファンデーションに惹かれたのもこの考え方からでした。4年間ほど私はこの方向に沿って積極的に仕事と取り組んできましたが、それには見切りをつけました、情報科学は制約がおく自己中心的だったからです。ある人の勧めでウィキペディアを知り、素晴らしいプロジェクトだとわかりました。はるかにオープンで人生に関わるあらゆるテーマと取り組むことが出来、1つの信念だけがあればよかったからです。私にとって、ウィキペディアはまったく利害の絡まない方法で知識を共有する素晴らしいツールとなっています。私の理想にとって完全なのです。安っぽく理想を訴える他の方法もありますが、それには馴染まないのです。」⁵

エスプリ・フュガスは1日に10時間以上ウィキペディアに費やすこともあり、ある種の依存症となっている状態である。ブリタニカ百科事典のように質や、秩序を保つために、管理者達は、報酬を求めることなく、ボランティアで、ウィキペディアに努力と時間を捧げているのである。

2.2 ウィキメディア財団

ウィキペディアは非営利目的のため、その活動から一切の収入を得ることをしていない。ウィキメディア財団は現在、カリフォルニア州サン・フランシスコに事務所を持っており、約10名の常勤職員がこの事務所で働いている。サーバーの管理担当には数人の契約職員を雇用している。国外にいる職員はフルタイム契約・パートタイム契約を問わず、すべて契約職員である。当然給料は少なく、広告収入もなく、記事の執筆は無償で行っている。しかしながら、ウィキメディア財団は、2006年の初めの純資産は270,000万ドルであり、2006年中に財団は総計151,000ドルに及ぶ資金援助および収益を得て、790,000ドルの支出があった。純資産は720,000ドル増え、総計100万ドルを超えた。2007年、財団は拡大しつづけ、純資産が1,700,000ドルとなった。2007年に収入も支出も、ほぼ2倍になった。どのように収入を得ていたのであろうか。2008年3月、財団はアルフレッド・P・スローン財団⁶から3年で300万ドルの寄付を受けており、2009年8月には、ウィキメディア財団はヒューレット財団から500,000ドルの贈与を受けている。2009年8月、en:Omidyar Network

⁵ ウィキペディア・レポリューションより引用

⁶ アメリカニューヨークに事務所を持つ慈善事業を行う非営利組織。1934年、ゼネラル・モーターズの社長兼CEOだったアルフレッド・P・スローンによって設立された。

はウィキメディア財団に対して 200 万ドルの提供を申し出た。2010 年、Google 社が 200 万ドルを財団に寄付した。このようにアメリカのいくつかの組織から多額の寄付を受けているが、最も寄付の大部分を占めるのは、サイトの表示によって募った寄付である。1 日あたり、多くのインターネットユーザーが 10 ユーロから 20 ユーロほどの寄付を集めているという。

図表 3 : サイトによる寄付の表示



(出典 ; ウィキペディア 寄付のページより引用)

ウィキペディアはインターネット上で最も有名な 5 つのブランドのうちの 1 つであり、今後の財源には不安を抱いていないと、理事長は力説するが、今後もこのような非営利形態を続けていくかどうかについては、注目する問題である。

3. ウィキペディアの課題

3.1 管理者側の虚偽

ウィキペディアは規模の拡大によって成功したわけだが、注目を浴びるその反面で、悪い場合には、サイトを混乱させるための目的である荒らし行為が絶えない。ウィキペディアは 2001 年 10 月から、投稿者・管理者達は十分な知識を持っており、ウィキペディアが掲げている方針に賛同しているものだと考え、彼らにメンテナンスを任せてきた。管理者はその多数の投稿者から選ばれた数百人である。しかしながら、その管理者側から虚偽を行っていた人物が、ウィキペディア英語版に設置されていた調停委員会の長から出てしまった。

アメリカの私立大学の神学教授で教会法の学位を持っていると称していた彼は、2005 年からウィキペディアに参加し、毎日 14 時間程の時間をウィキペディアに割いた。ローマ教皇三重宝冠のような専門的記事の投稿であったり、反対に歌手についての学問的ではない記事まで、書いていた。また数千件を超える記事の修正も行っていた。また調停委員会の

長を2度努めた上、管理者も兼任しており、問題のあるユーザーがいる場合、コンピューターから身元を特定し、荒らし行為を突き止め罰するという、重大な責任を背負った立場についていた。しかしながら、彼の私立大学の神学教授と優れた経歴は、全て虚偽で、経歴を詐称していたという事実が発覚した。実際はケンタッキーのいくつかの大学で学んでいた普通の24歳の青年であることが分かった。結局この青年の詐称が発覚後、彼が書いた記事は2万件以上にのぼったが、多数の意見に従い、削除されることとなり、信頼を要する管理者という地位から退かれることとなった。

3.2 疑問視されるコンテンツの信頼性

3.2.1 コンテンツの信頼性

この巨大化を続けた常識破りの百科事典だが、謝った情報がそのまま掲載されているという場合も少なくない。やはり資格を持たない、匿名のユーザーが編集が可能であるため、学者らにより執筆される書籍の百科事典と比較して、内容の信頼性を疑問視する声もある。ウィキペディアは間違いや問題のある記述が発見された場合、それを管理者や善意の利用者らが修正して精度を高めるという考えを取っているが、プロジェクトの匿名性と、何を記事化するかは個々人に一任される完全な自由主義、徹底された民主制のため、悪意ある書き手を防ぎ切れないという指摘がある。しかしウィキペディアは“内容の信頼性”という点は利用者の質に左右される。また、常に改変できるシステムを採用しているため記事が完成・確定されることは永久にない。

利用者にとってウィキペディアは、それなりの情報を無償で得られ、役立っていることは事実かもしれないが、学術的な信頼がなされていないウィキペディアは、引用する場面で誤ったりすると、大きな問題に発展してしまいう可能性がある。具体的に次の章の事例で考察していく。

3.2.2 教育現場の事例

ウィキペディアの記事の中にはもちろん学術的で、信頼性のある素晴らしい記事も多くあるが、中には謝った情報がそのまま掲載されている記事もある。そのためウィキペディアは教育現場において批判を受け続けている。

中学生、高校生、大学生は調べ物にウィキペディアを利用しているのか。利用しているとしたら、どの程度の関わり方なのか。

ウィキペディアを利用している、フランスの大学2年生の例である。『私が調べ物をするときには、しばしば取っ掛かりとします。』彼はウィキペディアを見た後、別のサイトに行き、調べたことをより詳しく探すという。紙の辞書は持っていないという。ウィキペディアの信頼度については『ウィキペディアが誰か分からない人が書いているのは知っているが、こんなに無料で便利な物を利用しないわけにはいかないのです。』と答えている。

一方でパリのアメリカン・ユニバーシティの学生は、ウィキペディアを「基本ツール」

でしかないと言う。ウィキペディアのサイトを主に概念の確認に使い、それから掘り下げるようにしていると言う。ウィキペディアの記事の終わりの、参照データを多く使い、さらにその情報源を辿り、さらに本で調べるようにしていると言っており、ウィキペディアを参考程度に利用し、公式の情報源を探すためのツールとして利用し、記事自体は完全には信頼していないようである。

3.2.3 新聞の事例

ウィキペディアの記事が公式の場面で使用され、問題となったケースもある。2007年7月5日の静岡新聞の1面コラムに書かれた記事だ。宮沢喜一元首相の北方領土交渉などのエピソードについての記事について、「ウィキペディアの記述と似ている、ウィキペディアの記述を引用したのではないか」という、読者からの指摘を受けた。記事を執筆した論説委員は、一般に知られている事実だと思い、出典を省いたという。ウィキペディア側は、ウィキペディアの記述は著作権法の認める範囲で引用することができる、としている。創始者のジミー・ウェールズ氏は、今回の問題点は出典を示さず引用し、報道倫理に反した点だと主張した。しかしながら、新聞社側が問題にしたのは、記者がウィキペディアを引用したこと自体を問題視したのであった。問題発覚後、各部の部長らが現場の記者に対し、「ウィキペディアを取材の参考にするのは構わないが、記事を書く際の出典として使うべきではない」と伝えたという。匿名のユーザーが執筆した記事を、日本国民の読む新聞記事の確認資料としては使うことは、フェアではないということである。

このように、ウィキペディアは記事自体が間違っている、間違っていないの問題以前に、気軽に利用できる便利さの一方で、溢れかえった情報の中から、我々が正しい情報源を選択していくことが困難になってきているかもしれない。

3.3 荒らし

ウィキペディアは誰でも編集できるという点から考えると、統制が行き届かず、無秩序な状態を想像してしまう。ウィキペディアが巨大化し、質が保持されているのは、善意ある管理者によって常に監視されているおかげである。しかしながら、すべての問題を防ぐことができるわけではなく、誰でも編集できるというウィキペディアの長所が、たちの悪いユーザーによって短所に変えられてしまう場合もある。記事の内容にまったく関係ない投稿や、記述をするなどのいたずらなどの荒らし行為をするユーザーも増えている。一言で荒らしといってもひとくくりにできないほど様々な手口、種類があるため、事例に沿って考察していく。

例えば、物議を醸す攻撃的な記事を作成するという荒らしの例だ。Gay Niggers Association of America (全米ゲイ黒人協会、GNAA) など、わざと攻撃的な名前の記事を作る。GNAA という団体が明確に存在するという根拠はなにもないが、多くの荒らしを行うもの達がこの団体の記事の作成を試みていた。

またウィキペディアの誰でも編集できるという機能に興味を持った者が、興味本位で本当に書き込めるかどうかテストとして、記事を編集する、悪意のない荒らしを行うものも絶えず存在している。初めて投稿する人のためにも、ウィキペディアには練習できるテストページが設けてある。にもかかわらず、故意的に未完成の記事を投稿する行為は、やはり荒らしと言えるであろう。

逆に悪意がある荒らしの例では、ウィキペディアの記事の中に「うんこ」等と下品な言葉を挿入したりする明確に荒らしと断定できるケースもある。判断しにくいさらに悪質と呼んでいい場合だと、記事に登場する年代を、1971年から1972年に変更するという、判断し難い微妙な荒らしである。こういった非常に悪質といえる荒らしは、常に編集・削除の履歴を監視している管理者側も早期発見が難しい。また荒らしを行う側は、行為に気づかれたとしても、そういった注意を引くことで快感を覚えるため、もぐら叩き状態で再発防止が困難であるのかもしれない。

3.4 3章のまとめ

3章では、管理者側の運営に関する問題、ウィキペディアを利用する側の2つの面から問題点や現状を考察した。管理者側は、管理者の経歴詐称の実例を見たが、その例のようにコミュニティ内で権力をふりかざし、明らかにコミュニティを混乱させたり迷惑行為を行った場合は、有無をいわず追放できる。しかし、普段は善良なユーザーを演じつつも、微妙な悪戯を行う荒らし等は、捕まえ難いし、そういった存在は付きものであるため、耐え続け、とにかく管理者が監視を強化するほかは方法はないのである。ウィキペディアの誰でも編集できるといったオープン性といった特徴からすると、荒らしや、悪戯などの問題は、残念だが避けることは不可能なのかもしれない。ウィキペディアには参考文献がきちんと記されている等、信頼できる記事もあり、こういった荒らし等の存在が、ウィキペディアの信頼性を欠く要因の1つであると思うので、今後はより一層監視を強化して頂きたい。

4. ウィキペディアの課題

4.1 編集合戦

ウィキペディアの大きな問題の1つとして「編集合戦」というものがある。通常ウィキペディアの記事の内容についての審議は話し合いを行うことが決められている。それによって記事の質を高めていくのだが、話し合いも行わず、第三者の意見に耳を傾けようとせず、他者の編集を繰り返し差し戻すことによって、自分の編集を押しつけようとすることを編集合戦と呼んでいる。ウィキペディア日本語版では編集合戦は禁止されており、違反者は投稿をブロックされる処置がなされ記事の編集ができないようにされる。編集合戦の判断基準として three-revert rule (3RR) というものがおかれている。これは、ページの一部であろうと全部であろうと、24時間に3度以上を差し戻しすると編集合戦と認識される

可能性がある。

4.2 管理者側（何を載せるか）

ウィキペディア発足当時、ジミー・ウェールズとラリー・サンガーは一般的な印刷版の百科事典に近いものにすることが目的であった。インターネットサーバーで展開するウィキペディアは印刷版のように、ページ数による制限などが無い。日々スペースは増加し続けることが可能である。そのため、アルファベット順や、あいうえお順に並べるといった概念は一切不要である。その代わりにウィキペディアには、テーマ別に分類はされているが、そこを入り口にして見る利用者は少ない。テーマ別に分類され、記事の収容スペースが無制限であるのならば、あらゆる記事を収録すべきだという考え方がある。対照的に、厳しい基準を設け、より人々に役に立つ内容だけを厳選し、百科事典に収録するにふさわしい記事を載せるべきだという考え方がある。両者の考え方は発足当時から現在まで、議論されている。しかし今現在、両者の間では次のような定義に落ち着いている。

もし対象とは無関係な信頼できる情報源から有意な言及があった場合、その話題は単独記事としての収録基準を満たすことが推定されます。⁷

つまりウィキペディアそのものが一次情報源にはならず、すでに存在する信頼できる一次情報源をもとに、文献なども明らかにした状態で記事として公表されるべきである。また一般的な百科事典に収録されていないような記事を収録する場合は、単独でリスト化されるべきだということである。もともと、「中立的な観点」「独自の研究は載せない」「検証可能性」がウィキペディアの方針なのだが、やはり完璧に守られているとは言い難い。その結果、ウィキペディアには「珍項目リスト」というものが作られ、伝統的な紙の百科事典には載らないようなテーマが単独で収録されている。また百科事典にはふさわしくないという指摘がなされ、削除依頼を受けた記事について、議論をする場である「削除投票ページ」が設立されている。こういった公共の討論の場を設けることによって、ウィキペディアのオープン性を残しつつも、判断し難い曖昧な記事についても対応できるようになっている。

伝統的な紙の百科事典では収録できない記事を収録できる事実こそが、ウィキペディアならではの長所だと思う。載せる記事については、一概に線引きすることは難しい。削除投票ページも、削除の依頼を受け、すぐに多数決投票等を行って削除するのではなく、投票制を取っておらず、長い討論の末、吟味するそうだ。こうした参加型の百科事典は、今までにはないものであり、こうしたオープン性を利用することにより、さらに多くの利用者が納得したものを作りあげることができるのではないかと。

4.3 名誉毀損問題

⁷ ウィキペディア・レボリューション参照

ウィキペディアには、芸能人や著名人に関する誹謗、中傷などの名誉毀損の記事があふれている。匿名ユーザーが書いた、出典のない記事は非常に多い。そうした書き込みをされた人からの訴訟可能性は非常に高い。投稿者は編集内容について法的責任があるが、ウィキメディア財団は電気通信法 230 条の免責事項によって、アメリカの通信事業者として保護されている。そのためサイト上のコンテンツには責任がなく、告発された場合、投稿をブロックする等の処置は取れるが、編集者の責任を取るということはない。

グーグル検索のトップに表示されるようなサイトにまで成長したウィキペディアだが、その反面影響力や注目度も上がった。そのようなサイトを利用し、誹謗、中傷等の名誉毀損記事を書き込むことは非常に卑劣な行為である。今後訴訟を起こされるリスクがあるのは、編集者であろう。編集者にはこの状況を十分は理解し、今後責任を持って記事を投稿していただきたい。

おわりに

ウィキペディアは発足当初、運営している中核なコミュニティは数十人であった。利用しているユーザーは数百人であり、たった一つの英語の記事からスタートした。それが現在では、中核的なコミュニティは数百人ものに増大し、世界各国に散らばる、名前も顔も分からない同士のコミュニティに増大した。言語は、たった1言語からスタートし、現在では250以上もの言語で運営する巨大サイトに発展した。それに伴い、方針は厳しくなり、ページの編集の規則もますます複雑になっていき、しっかりとしたコミュニティに成長した。

このようなウィキペディアのインターネット界での飛躍によって、人々の知識の集大成ができた。一般的な百科事典では、最新の情報に保持することが難しい、収容スペースに限界がある、高額なため入手するのに困難等のデメリットがあるが、ウィキペディアはこれらの問題を全て解決した。

しかしながら、こうした発展の代償として、影響力が高まったことで、ウィキペディアの特性を悪用した、荒らしが絶えなかったり、教育現場にも衝撃が走った。

結論として、ウィキペディアは、今現在ウィキペディアは、専門家等が執筆に加わらない限り、一次情報源とはいえない。これだけの影響を考えると、役に立っていることは事実である。今後、引用する利用者たちは、出典を明確にし、自らが信頼できる情報であるかどうか取捨選択していかなければならない。

またこれだけの影響力、そしてウィキペディアのオープンな特性を見ると、今後も荒らし等の問題は避けることはできないかもしれない。管理者達は、根気強くこれらのユーザーと戦い続けていただき、より信頼のあるコンテンツとして盛り上げ、質の向上を期待したい。

今後、誰でも編集できるウィキペディアの特性が封鎖され、実績のある管理者のみによる編集が行われる可能性もある。また現在は主にボランティアや寄付で運営を行っているが、今後、営利化を行って、記事の投稿に関して報酬が出るようになるかもしれない。もしそうなったら、更なる拡大が狙えるが、報酬目的の編集者も現れ、質の低下が予想されるであろう。様々な問題を抱えているウィキペディアからだからこそ、様々な可能性が予想でき、今後の展開に目が離せない。

参考文献及び参考資料

《書籍》

- ・(著) ピエール・アスリーヌ
 ピエール・グルデン
 フロランス・オクリ
 ペアトリス・ロマン=アマ
 デルフィーヌ・スーラ
 タシロ・フォン・ドロステ・ツー・ユルショフ
 (訳) 佐々木 勉 『ウィキペディア革命 そこでは何が起きているのか?』 2008年
- ・(著) アンドリュー・リー
 (訳) 千葉敏生 『ウィキペディア・レボリューション 世界最大の百科事典はいかにして生まれたか』 2009年

《URL》

- ・朝日新聞デジタル <http://www.asahi.com/>
- ・Wikipedia 日本語版 <http://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:日本語版の統計>
- ・Wikipedia ジミー・ウェールズ
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B8%E3%83%9F%E3%83%BC%E3%83%BB%E3%82%A6%E3%82%A7%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%82%BA>
- ・Wikipedia 珍項目
<http://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:%E7%8F%8D%E9%A0%85%E7%9B%AE>
- ・

(注) URL は 2015 年 1 月 25 日現在のものである